

兵庫津遺跡

第84次調査

発掘調査報告書

2021

神戸市

序

兵庫津は、大輪田泊と呼ばれた古来より国内の海運や外国との貿易の窓口として重要な役割を担ってきました。そして、幾多の戦乱や自然災害を乗り越え国際港湾都市神戸へと続いています。

兵庫津遺跡は、これまでの発掘調査で湊町の町屋跡などが検出されており、当時の暮らしを伺うことができる資料が多数確認されています。今回の調査結果からも、兵庫津の町の歴史の一端を知ることができる資料が確認されました。

今回の調査成果をまとめました本書が、地域の歴史研究、文化財の保護・普及啓発の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査、ならびに本書の作成にご協力いただきました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

神戸市文化スポーツ局文化財課

例　　言

1. 本書は、神戸市兵庫区三川口町1丁目1-61・62で実施した共同住宅建設に伴う兵庫津遺跡第84次調査の発掘調査報告書である。
2. この調査は、神戸市が日本レジデンシャル株式会社からの委託を受けて、現地調査を令和2年3月9日から令和2年6月12日にかけて実施したものである。また、神戸市埋蔵文化財センターにて出土遺物の整理、並びに発掘調査報告書の作成をおこなった。
3. 現地での調査は神戸市教育委員会文化財課（当時）学芸員浅谷誠吾、加納大誉が担当した。保存科学調査は、担当係長 中村大介、学芸員 山田侑生が行い、遺物整理は山田侑生、遺物実測は浅谷、加納が行った。本報告書の執筆は浅谷、加納が行った。ただし金属器の執筆実測に関しては山田が行った。
4. 現地での構造写真撮影は調査担当者が行った。遺物写真撮影は西大寺フォト杉本和樹氏が神戸市埋蔵文化財センターにおいて行った。
5. 本書に記載した調査地点の位置図は神戸市発行の1/2500地形図「兵庫」を使用した。
6. 本書に使用した方位・座標は平面直角座標系第V系（世界測地系）で、標高は東京湾平均海面（T.P.）で表示した。
7. 調査で出土した遺物および写真、図面等の記録類は、神戸市埋蔵文化財センターにて保管している。
8. 発掘調査の実施及び本報告書の刊行に際しては、事業者である日本レジデンシャル株式会社に多大なるご協力を頂いた。記して御礼を申し上げます。
9. なお、文化財資料を保管する文化財課は、令和2年度の組織改正で教育委員会事務局より、市長部局である文化スポーツ局に移管されている。

組織図

令和元年度

神戸市文化財保護審議会 史跡 考古資料担当
黒崎直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長
菱田哲郎 京都府立大学文学部教授
神戸市教育委員会事務局
教育長 長田淳
教育次長 後藤徹也
文化財課長 安田滋
埋蔵文化財センター担当課長 前田佳久
埋蔵文化財係長 東喜代秀
担当係長 斎木巖 松林宏典 中村大介
調査担当学芸員 浅谷誠吾 加納大誉
遺物整理保存科学担当学芸員 山田侑生

令和二年度

神戸市文化財保護審議会 史跡 考古資料担当
黒崎直 大阪府立弥生文化博物館名誉館長
菱田哲郎 京都府立大学文学部教授
神戸市文化スポーツ局
局長 囲田健二
副局長 宮道成彌
文化財課長 安田滋
埋蔵文化財センター担当課長 前田佳久
埋蔵文化財係長 東喜代秀
担当係長 斎木巖 松林宏典 中村大介
調査担当学芸員 浅谷誠吾 加納大誉
遺物整理保存科学担当学芸員 山田侑生

目 次

序

例言 組織図

目次

第1章 はじめに（浅谷 加納）

 第1節 兵庫津遺跡の立地と歴史的環境 1

 第2節 調査に至る経緯と経過

 (1) 調査に至る経緯 4

 (2) 調査の経過 4

第2章 調査の概要（浅谷）

 第1節 調査区の設定と調査方法 4

 第2節 第1遺構面 4

 第3節 第2遺構面 8

 第4節 第3遺構面 8

 第5節 第4遺構面 11

 第6節 第5遺構面 15

 第7節 第6遺構面 19

第3章 まとめ

 第1節 調査地周囲の状況について（浅谷） 23

 第2節 大輪田泊・兵庫津の変遷について（浅谷） 23

 第3節 金属器について（山田） 26

挿図目次

図 1 兵庫津遺跡の位置	1	図 14 第4遺構面出土土器実測図	15
図 2 兵庫津遺跡第84次調査地点	2	図 15 第5遺構面平面図	16
図 3 調査区設定図	4	図 16 第5遺構面出土土器実測図	17
図 4 調査区南壁東壁土層断面図	5	図 17 第5遺構面出土土器実測図	18
図 5 第1遺構面平面図	6	図 18 第6遺構面平面図	20
図 6 第1遺構面 第2遺構面出土土器実測図	7	図 19 第6遺構面出土土器実測図	21
図 7 第2遺構面平面図	9	図 20 奈良～平安時代・鎌倉～室町時代遺構面 調査地点位置図	24
図 8 第3遺構面平面図	10	図 21 第83次調査奈良～平安時代 後背湿地出土遺物 参考資料	25
図 9 第3遺構面出土土器実測図	11	図 22 SK304 出土巡方実測図	25
図 10 SK401 平面図 立面図 土層断面図	12	図 23 金属製品観察表	26
図 11 SE402 平面図 立面図	12	図 24 金属製品実測図	27
図 12 SX401 平面図 立面図	13		
図 13 第4遺構面平面図	14		

写真図版目次

写真図版 1

- 1区第1遺構面全景（南西から）
2区第1遺構面全景（南西から）

写真図版 2

- 2区第2遺構面全景（南西から）
1区第3遺構面全景（南西から）

写真図版 3

- 2区第3遺構面全景（南西から）
1区第4遺構面全景（南西から）

写真図版 4

- 2区第4・第5遺構面全景（南西から）
1区第5遺構面全景（南西から）

写真図版 5

- 1区第6遺構面全景（南西から）
2区第6遺構面全景（南西から）

写真図版 6

- 2区第6遺構面自然地形全景（南西から）
1区SX401（北西から）

写真図版 7

- 1区SK401（南西から）
1区SK409（北から）

写真図版 8

- 1区SX519（南から）
1区第5遺構面柱穴列（北から）

写真図版 9

- 2区SE301（南西から）
2区SE402（南から）

写真図版 10

- 第1・第2遺構面出土土器
第3遺構面出土土器

- 第4遺構面出土土器
第5遺構面出土土器

写真図版 11

- 第5遺構面出土土器
第6遺構面出土土器
第6遺構面自然地形の落込み出土土器

- SX401 出土備前焼鉢

写真図版 12

- SK401 出土土師器皿
SK401 出土備前焼甕

- SK509 出土土師器皿
SX504 出土土師器皿

写真図版 13

- 出土石製品
SK304 出土巡方（表）
SK304 出土巡方（裏）
出土金属遺物
出土金属遺物

第1章 はじめに

第1節 兵庫津遺跡の立地と歴史的環境

兵庫津遺跡は、古湊川により形成されたと推定される扇状地末端から砂州の臨海部に位置し、南北約2km、東西約1.5 kmの範囲に広がる奈良時代から近世にかけての遺構が確認されている遺跡である。

兵庫津遺跡は、和田岬により西風を避けることができる位置にあり、古くから港湾施設が整備され、中世以降は港湾都市として発展した。

この兵庫津は奈良時代には大輪田泊と呼ばれ、史料による初見は、安元元年（1175）に記された行基の伝記である『行基年譜』に、天平十三年（741）摂津国菟原郡宇治郷に大輪田船息を築いたとの記述があることである。また平安時代初期に編纂された『日本後紀』で、弘仁三年（812）にも大輪田泊修築の事が記されている。

平安時代末には平清盛により大輪田泊の経ヶ島築造が行われ、日宋貿易の拠点となつた。近隣には平氏に関連する遺跡も散見され、祇園遺跡では貴族の邸宅に伴う園池遺構が検出された他、楠・荒田町遺跡でも屋敷に伴う建物や二重に巡る大溝が確認されている。また、二葉町遺跡では当該時期の集落も確認され、白磁四耳壺等の貿易陶磁も出土している事などから平氏との関連も考慮できる集落である。

その後、源氏と平氏の抗争による一の谷合戦では大輪田泊も戦場となつたらしい。『玉葉』寿永三年（1184）二月八日条には、源氏軍の多田行綱の急襲により福原本陣が総崩れになり、人々

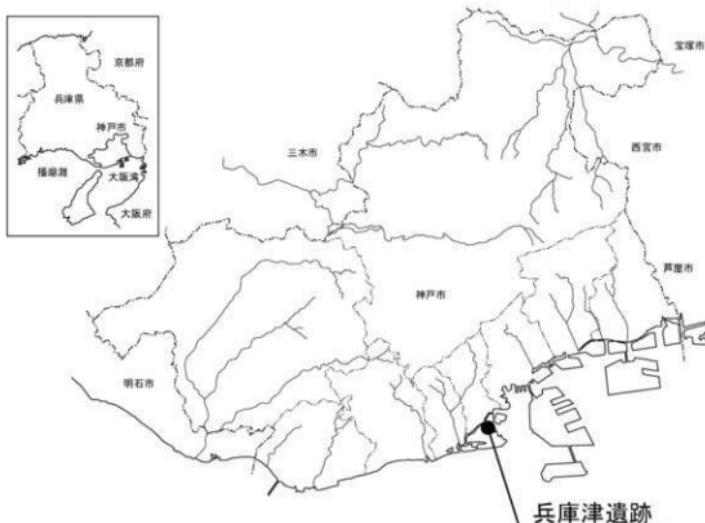


図1 兵庫津遺跡の位置

の乗船していた40～50艘が「島辺」にあったが放火により焼死、との記事があり、大輪田泊で源氏軍の火矢により、経ヶ島付近から海上に逃れようした平氏の軍船が炎上したとも推定されている。

鎌倉時代に入り大輪田泊は荒廃したが、『東大寺文書』によると、健久七年（1196）東大寺僧俊乘坊重源により大輪田泊の改修に関する申請が行われたと記されている。

兵庫の地名では『九条家文書』長治二年（1105）に「兵庫庄」と莊園名で記されている。

兵庫津に関しては、「北条業時施行状」徳治二年（1307）「〈一州・兵庫・渡辺〉商船津料事」との記事がある。より時代を下り室町時代には、明徳二年（1391）に記された『西大寺末寺帳』で西大寺末寺に「能福寺 兵庫」との記事がある。また、同年7月18日『兼宣公記』に「義満兵庫濱に遊ぶ」との記事がある。これらの文献資料から、少なくとも1307年には大輪田泊ではなく、すでに兵庫と呼称されていた事は理解できる。この足利義満による遣明船の発着港として兵庫津は繁栄した。

東大寺領摂津兵庫北関の記録簿である文安二年（1445）作成の『兵庫北関入船納帳』には北関ほぼ1年間の入港船舶数、船籍地、積荷数等が記され、入港船の船籍は瀬戸内海を中心に四国・九州にまで及び、2000隻近くの入港数であった。このことから、室町時代に入ると寺社勢力の庇護のもと瀬戸内海航路の良港として繁栄し、貿易の拠点となっていたことが分かる。

その後、室町時代後期に入り、応仁・文明の乱（1467～1477）では、兵庫津は西軍大内勢の上陸地点となった等、争乱の場となり荒廃したとされている。その結果、対明船の発着地は堺に移る。しかし、近年の発掘調査の成果では、15世紀後半から16世紀にかけての遺構・遺物量も多く、この時期に国内貿易港としての兵庫津の町の衰退を裏付ける資料は見つかっていない。



図2 兵庫津遺跡第84次調査地点 S=1/2500

戦国時代には、経済的な面だけでなく、兵員や軍需物資の輸送などの面からも戦国大名達に着目されるようになる。

天正九年（1581）には、池田恒興が、織田信長に対し反乱を起こした荒木村重の花隈城を攻略した。その後、恒興は兵庫津に兵庫城を築き、町の周囲には都賀堤と呼ばれる土堤を構築した。

天正十一年（1583）羽柴秀吉は池田父子を美濃に移封し、兵庫津は三好孫七郎（後の秀次）に治めさせた。

その後、慶長元年（1596）に発生した慶長大地震で壊滅的被害を受けたが復興している。関ヶ原の戦い後も豊臣家の蔵入地として存続し、豊臣秀頼の家臣であった片桐貞隆が代官とされた。そのため、兵庫城は片桐陣屋と呼ばれていた。

慶長二十年（1615）に豊臣家の滅亡後は幕府領に編入された。元和三年（1617）に尼崎藩領となっている。尼崎藩領期の元禄九年（1696）に作成された現存する最古の絵図で『摂州八部郡福原庄兵庫津絵図』（以下「元禄兵庫津絵図」）では、都賀堤に囲まれた町屋がうかがえる。近世の兵庫津については「元禄兵庫津絵図」等により、町並みの様子が知られていたが、真光寺境内を巡る濠の北東角、水路、道路を検出した平成13年度第26次調査、平成14年度第29次調査の柳原惣門の調査、平成16年度第35次調査の兵庫陣屋及び勤番所関連遺構の検出などにより、絵図の正確性が立証された。

兵庫津は宝永五年（1708）の大火により、被害を受けたと記録されている。平成10年度第14次、平成11年度第17・20・21次調査、平成13年度第24次調査等でこの大火に伴うものと推定される火災層が検出され、火災により焼失した町屋群の検出等から、町割や町屋の様子等も徐々に明らかとなっている。火災による被害は受けたが港湾都市としては発展を続け、18世紀前半には人口2万人以上であったとされている。

明和六年（1769）には幕府の直轄地に編入され、兵庫津の町は大坂町奉行所の支配となった。陣屋には勤番所が設置されたが、敷地が広すぎたため、主殿部分を中心とした施設を残し、町場として払い下げられた。第62次調査による兵庫城の調査では、兵庫城の堀が堆積物により縮小し悪水抜溝となり、近代には矮小な底部にレンガを敷いた溝となり、堀跡に町屋が広がった事実も確認されている。

幕末には外国船が頻繁に日本近海で姿を見せるようになった。嘉永七年（1854）には、ロシア使節ブチャーチンが大阪湾に侵入する事件が起きた。これを機に大阪湾岸の防備補強が図られ、文久三年（1863）には兵庫津の両端である淡川崎と和田岬で砲台が建設された。

その後、慶応3年（1867）通商条約に基づき兵庫開港となる。しかし、実際に港として整備されたのは、東側に位置する神戸村の海岸であり、以後外国との貿易を担う港湾施設を中心として外国人居留地など都市の拠点は東の地域へと移動する。ただし、明治時代以降の政府が神戸港、兵庫港を一体の港湾施設として整備し、機能させようとしていた事は、明治40年度神戸市役所発行の『神戸築港問題沿革史』『神戸築港全圖』や大正11年度内務省神戸出張所発行の『神戸港修築計画書平面図』等から想定できる。

明治元年（1868）には、最初の兵庫県庁が兵庫城跡に置かれた。しかし、狭小であったため、4ヶ月程で坂本村（現在の地）に移設している。

今回の調査地は「元禄兵庫津絵図」で確認すると、西ミヤ町辺りに位置する。この事から元禄時代には西国街道の宿場町で、寺町に囲まれた場所に位置していたと理解できる。

第2節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

今回、神戸市兵庫区三川口町で共同住宅建設に伴い試掘調査を実施した結果、中近世の遺物と遺構が確認された。そのため、工事により埋蔵文化財が影響を受ける約 220 m²について、本発掘調査を実施した。

(2) 調査の経過

残土置場を確保するため調査区を2区分し、南半部を1区、北半部を2区として、分割して調査を実施した。1区の調査は3月9日 начиная с, 4月23日に終了し、2区の調査は4月24日に開始し、6月8日に終了した。その後場内の埋め戻しを実施し、6月10日に調査を終了している。

第2章 調査の概要

第1節 調査区の設定と調査方法

調査地の現標高は約 2.5m ~ 3.5m であるが、標高約 2.0m 付近までは盛土と攪乱である。

遺構面は1区と2区で堆積状況が異なり、1区で5面、2区で6面を確認している。

基本層序は、第1遺構面は盛土、攪乱直下であり、標高約 2.0m の明灰黄色砂質土上面が遺構面となる。第2遺構面は、この明灰黄色砂質土上面から約 20cm 下の黄色砂質土上面が遺構面となる。第3遺構面はこの黄色砂質土上面より約 20cm 下の明黒灰色砂質土及び灰色砂質土上面が遺構面となる。第4遺構面はこの明黒灰色砂質土より約 10cm 下の灰色砂質土上面が遺構面となり、第5遺構面はより 20cm 下となる黄色粗砂上面となる。この黄色粗砂上面より 20cm 下の明黄色粗砂上面が第6遺構面であり、この第6遺構面を形成する明黄色粗砂から落ち込む、遺物を含む茶灰色砂質土を自然地形の落ち込みとして掘削した。第6遺構面で標高約 1.0m だが、すでに湧水が激しい状態であった。

これより下層は標高約 50cm まで断ち割り調査を実施したが、無遺物であったため調査を終了している。

第2節 第1遺構面

18世紀頃～幕末までの遺構面である。一部、近代にも入る。

SK 103 調査区南端部で確認した土坑である。約 1.15m × 0.4m 以上で、深さ約 30cm を測る。土坑底部は焼土化している。

SK 104 幅約 1.4m × 1.2m で、深さ約 30cm を測る土坑である。底部は焼土化している。備前焼甕、肥前磁器、土師器が細かな破片で出土している。

SK 105 調査区南端部で確認した土坑である。約 1.55m × 0.74m 以上で、深さ約 74cm を測る。

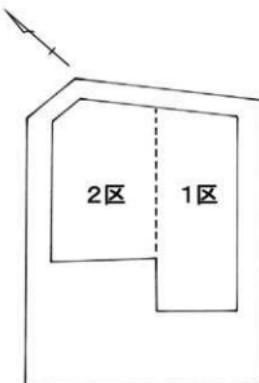


図3 調査区設定図

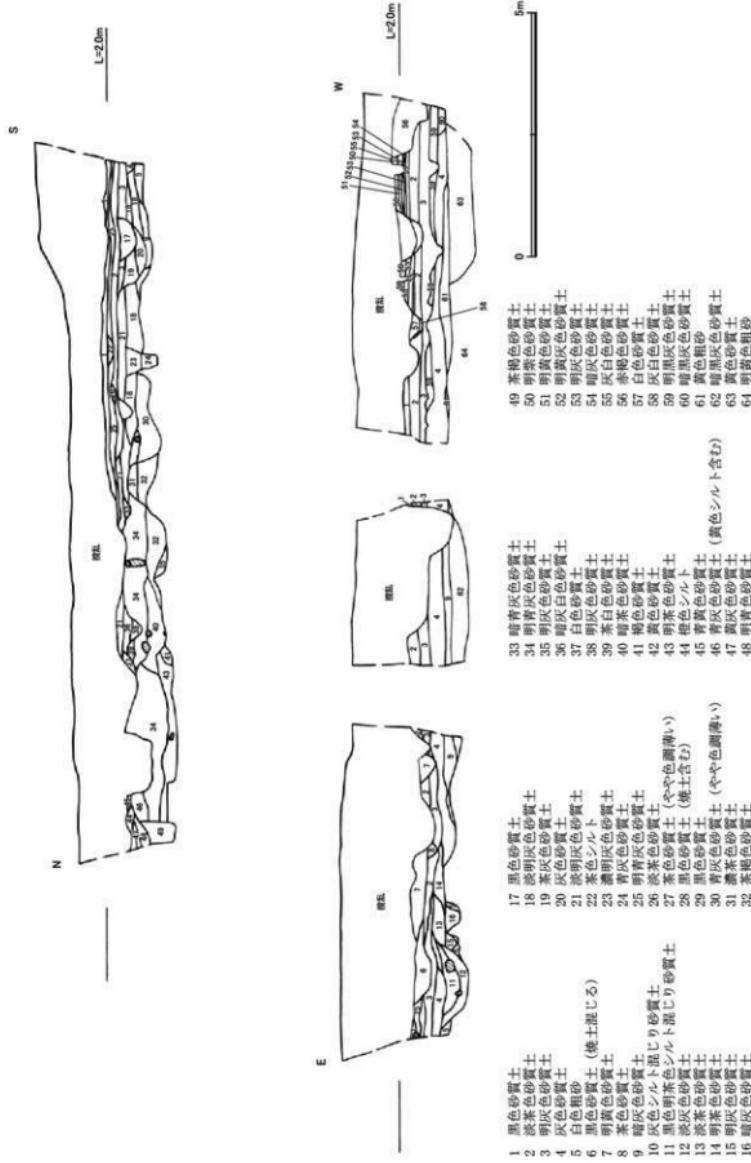


図 4 調査区南端東壁土壌断面図

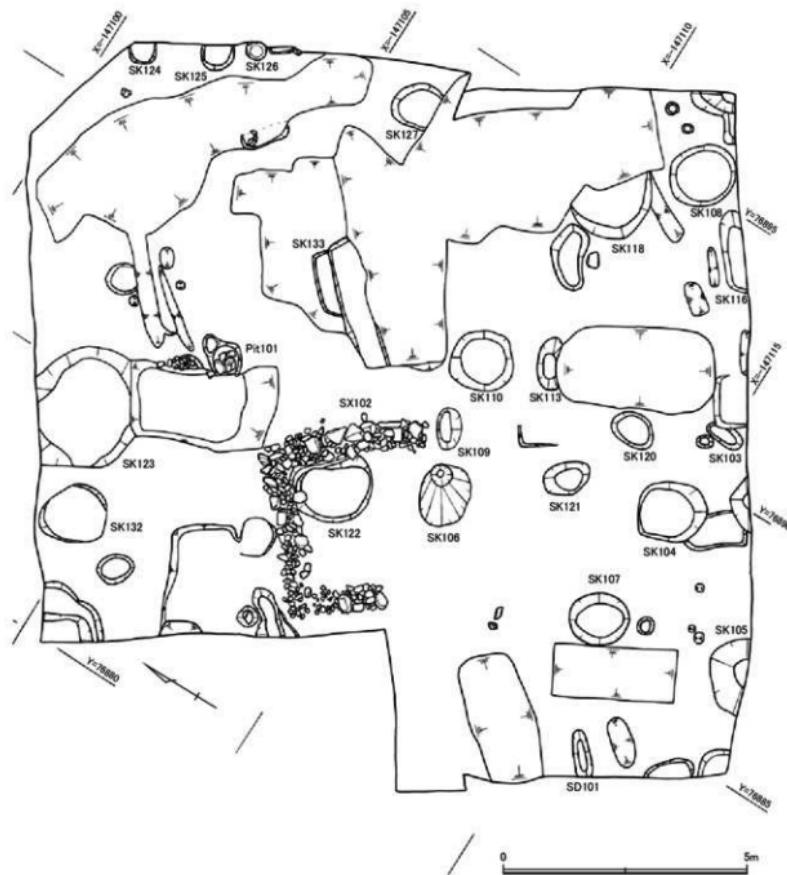


図5 第1遺構面平面図

備前焼擂鉢、土師器が細かな破片で出土している。

SK 106 約 1.3m × 1.1m で、深さ約 1.7m を測る土坑である。土師器の細片が少量出土している。

SK 107 約 1.2m × 1.08m で、深さ約 14cm を測る土坑である。焼土塊が出土している。

SK 108 約 1.13m × 1.34m で、深さ約 48cm を測る土坑である。18世紀頃の炮烙が出土している他、備前甕胴部、肥前磁器碗が出土している。

SK 109 約 68cm × 97cm で、深さ約 14cm を測る土坑である。備前焼と肥前磁器の細片が出土している。

SK 110 約 1.24m × 1.23m で、深さ約 58cm を測る土坑である。遺構内の大半は暗灰色砂質土が

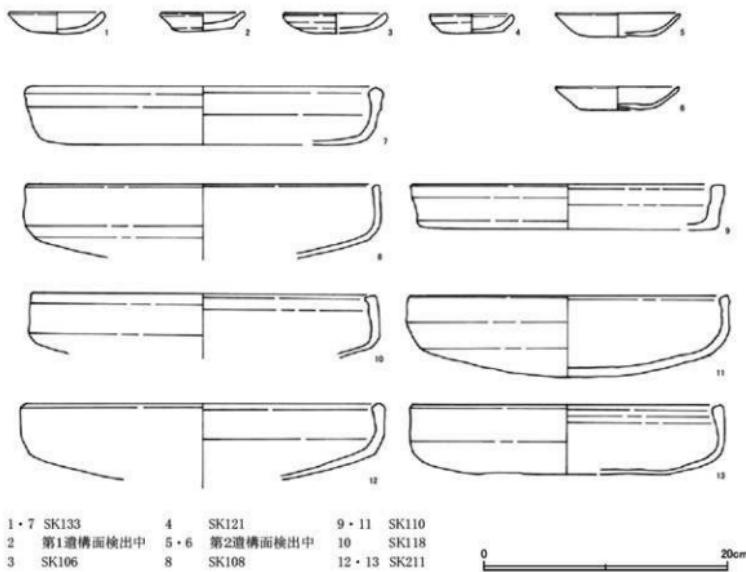


図6 第1造構面 第2造構面出土土器実測図

堆積している。19世紀頃の炮烙の他、肥前磁器も出土している。

SK 113 南側を攪乱により削平されている。幅約1.05m×0.4m以上で、深さ約35cmを測る。

SK 116 調査区南端で確認した土坑である。幅約1.7m×0.44m以上で、深さ約48cmを測る。堆積層は水平堆積に近い状況が観察できる。最上層に再掘削された後に堆積したとも見える黄色粗砂が堆積している。肥前磁器片が出土している。

SK 118 東側を攪乱された土坑である。約1.8m×1.1m以上で、深さ約50cmを測る。18世紀頃の炮烙が出土している。

SK 120 約66cm×94cmで、深さ約10cmを測る土坑である。コンニャク印判の五弁花が画かれた皿を含む肥前磁器が出土している。

SK 121 約95cm×70cmで、深さ約12cmを測る。18世紀頃のロクロ土師器皿が出土している。

SK 122 後述するコ字状石敷き造構の下面で確認した土坑である。約1.6m×1.2mで、深さ約50cmを測る。

SK 123 調査区北端部で確認した土坑である。約2.5m×2.0m以上で、深さ約80cmを測る。ロクロ土師器皿の他、19世紀頃の炮烙、焼土、鉄滓が多く出土している。

SK 124 調査区東端部で確認した土坑である。約54cm×46cm以上で、深さ約47cmを測る。

SK 125 調査区東端部で確認した土坑である。約67cm×53cm以上で、深さ約12cmを測る。コンニャク印判の五弁花が画かれた肥前磁器の皿が出土している。

SK 126 調査区東端部で確認した土坑である。幅約43cm×40cm以上で、深さ約5cmを測る。

備前焼窯底部が土坑内に据えてある状態で検出した。

SK 127 南側を攪乱により削平されている。幅約 98cm × 88cm 以上で、深さ約 20cm を測る。

SK 132 調査区北端付近で確認した土坑である。幅約 1.3m × 1.35m で、深さ約 41cm を測る。

SK 133 南側を攪乱されるが、長方形の土坑状の落ち込みとして掘削した。遺構の本体は幅約 0.75m × 2.75m 以上で、深さ約 45cm を測る。

SD 101 幅約 44cm で、深さ約 27cm を測る溝である。18世紀の肥前磁器が多数出土している。

SK 102 ロ字状に巡る石敷き遺構である。石敷き下面からは幕末頃の遺物が出土したが、上面からは近代以降の遺物も出土し、幕末～近代頃の建造物に伴う基盤だと想定する。石敷きの幅は約 40cm で、それぞれの辺の長さは約 3.7m、3.7m、2.1m である。

Pit 101 幅約 40cm で、深さ約 18cm を測る柱穴である。底部に幅約 20cm の根石を確認している。柱穴の列は確認していない。

第 1 遺構面のまとめ

第 1 遺構面では、幕末～近代にかけての建造物に伴う基盤が確認された。また、18世紀頃から以降には炭が堆積し、底部が焼土化している土坑数基を含む、多くの土坑が確認されている。

焼土坑からは、鉄滓も出土している。鍛冶関連の遺構や、他に廃棄土坑も含まれると考えられる。

第 3 節 第 2 遺構面

18世紀頃～幕末までを主とする遺構面である。1区の第 1 遺構面を形成する層が、2区では 2 層に分層でき、第 1、第 2 遺構面と細分する事ができた。この 2 区にだけ確認できる第 2 遺構面について説明する。

SK 206 調査区北端部で確認した土坑である。約 1.9m × 0.65m 以上で、深さ約 26cm を測る。

SK 209 約 1.8m × 1.33m で、深さ約 41cm を測る土坑である。南半に集石が存在する。

SK 211 約 57cm × 68cm で、深さ約 13cm を測る土坑である。19世紀頃の炮烙が出土している。

SD 201 西端部で検出した小溝である。幅約 50cm で、深さ約 15cm を測る。東西方向に約 1.0m 伸びており、西側の調査区外へと続いている。

第 2 遺構面のまとめ

第 1 遺構面で 18世紀～幕末の遺構が確認されているが、第 1 遺構面を形成する層は北半部の 2 区では 2 層に分かれている。第 2 遺構面検出中に柿釉クロ土師器皿が出土している。第 1 遺構面と第 2 遺構面の遺構には大きな時期差は認められない。第 1 遺構面と同じく廃棄土坑が含まれる可能性がある。

第4節 第 3 遺構面

主に 15世紀～16世紀で、17世紀頃の遺構も含む遺構面である。石製硯が 1 点出土している。

SK 301 西側を攪乱により削平されている土坑である。幅約 2.53m × 1.95m で、深さ約 52cm を測る。16世紀頃の土師器皿が多数出土している。

SK 302 南側の一部を攪乱されている土坑である。約 3.34m × 1.7m で、深さ約 53cm を測る。16世紀～17世紀頃の土師器皿、炮烙、備前焼擂鉢、備前焼大甕胴部が出土している。

SK 303 SK 301 の埋没後に掘削された土坑である。約 83cm × 57cm で、深さ約 20cm を測る。

SK 304 西側を攪乱されている土坑である。幅約 3.55m × 2.9m で、深さ約 50cm を測る。備前焼甕胴部片、16世紀頃の土師器皿、羽釜等と共に、おそらく平安時代と考えられる滑石製巡方も出土している。

SK 305 約 97cm × 114cm で、深さ約 35cm を測る土坑である。16世紀頃の土師器皿と備前焼擂鉢、備前焼大甕が破片で出土している。

SK 312 調査区北端部で確認した土坑である。約 3.14m × 2.66m 以上で、深さ約 44cm を測る。多数の礫と共に、15世紀～16世紀頃の備前焼擂鉢、土師器皿、羽釜等が出土している。

SK 315 約 1.82m × 1.42m で、深さ約 31cm を測る土坑である。16世紀頃の土師器皿が出土している。

SK 317 約 1.52m × 2.88m で、深さ約 51cm を測る不定形の土坑である。礫が多数混入している。15世紀頃の備前焼擂鉢が出土している。

SD 301 約 85cm で、深さ約 14cm を測る溝である。南北方向に約 4.3m まで伸び、南側で攪乱により削平され消滅している。両肩部に石列が存在する。何らかの建物に伴う溝とも考えられるが、削平されており、遺構の時期も含め詳細は不明である。

SD 302 幅約 40cm で、深さ約 5cm を測る小溝である。SD 301 とやや方向を違え、南北方向に

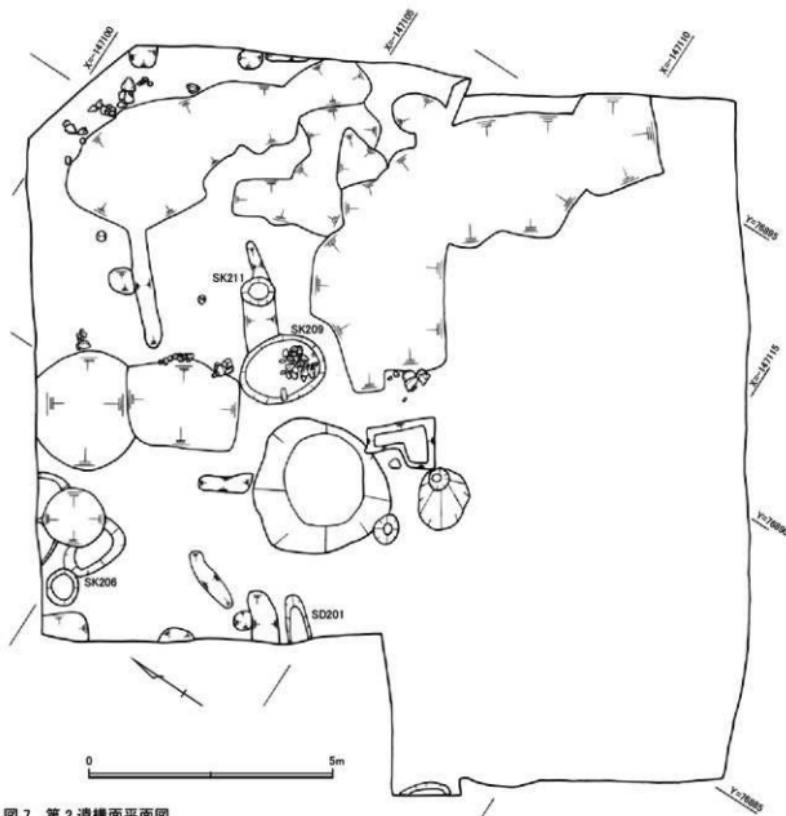


図 7 第 2 遺構面平面図

約2.3mまで伸びている。両肩に石列が存在する。SD 301と同じく削平されており、何らかの建物に伴う溝の可能性も考えられるが、遺構の時期も含め詳細は不明である。

SE 301 挖形で一边約3.1m、井戸枠内で一边約1.85m、深さ約30cm以上を測る石組井戸である。16世紀頃の土師器皿が多数出土している他、備前焼甕胴部片も出土している。

第3遺構面のまとめ

上層と同じく、建造物に伴う柱穴等は確認されず、遺構は土坑が主体であり、井戸も確認された。土坑は土師器皿や甕が多く確認でき、廃棄土坑であった可能性もある。

ただし石列を伴う何らかの建物等に伴う側溝と考えられる小溝も2条確認でき、上層の遺構

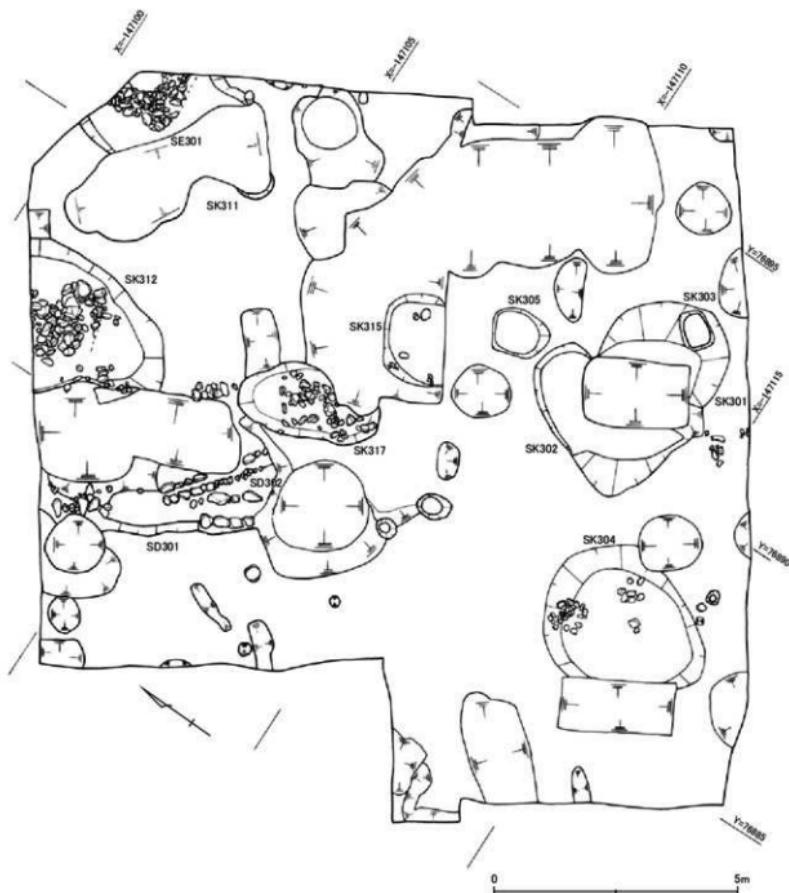


図8 第3遺構面平面図

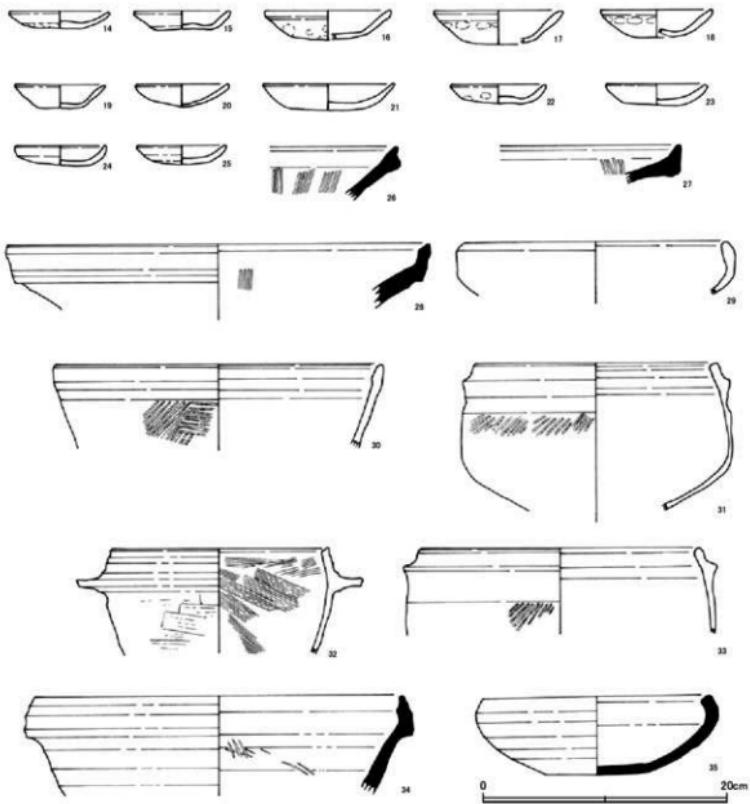


図9 第3遺構面出土土器実測図

面とは異なる遺構も存在する。この小溝から西側は第3遺構面では遺構は確認できず、黄褐色砂質土が堆積している。この黄褐色砂質土の位置に存在した何らかの建物等に伴う側溝とも想定はできるが、この小溝自体が削平され、部分的に残存する状況のため、詳細は不明である。

第5節 第4遺構面

15世紀～16世紀頃の遺構面である。

SK 401 西側と北側を擾乱により削平されている。約1.6m×1.3m以上で、深さ約60cmを測る土坑である。15世紀～16世紀頃の土師器皿多数と備前焼大甕が出土している。

SK 402 調査区西端部で確認した土坑である。約1.6m×0.9m以上で、深さ約48cmを測る。備前焼大甕と擂鉢の口縁部片が出土している。遺物は上層からの出土が多い。

SK 403 SK 402 に西側を削平されている。約 1.0m × 1.1m で、深さ約 22cm を測る土坑である。備前焼甕と土師器皿が破片で多く出土した。

SK 404 幅約 90cm × 75cm で、深さ約 18cm を測る土坑である。15世紀～16世紀頃の土師器皿が多数出土している。土師器皿は上層からの出土が多い。他に備前焼甕の破片も出土している。

SK 405 調査区南端部で確認した土坑である。約 1.2m × 0.88m 以上で、深さ約 30cm を測る。15世紀～16世紀頃の土師器皿が出土している。

SK 406 約 1.05m × 0.9m で、深さ約 94cm を測る土坑である。土師器の細片や土錐が出土している。

SK 407 西側を攪乱により削平されている土坑である。残存部では約 105cm × 35cm で、深さ約 30cm を測る。備前焼甕胴部破片や土師器の細片が出土している。

SK 408 北側を攪乱により削平されている土坑である。残存部で約 95cm 以上 × 64cm 以上、深さ約 36cm を測る。土師器の細片や瓦質碗の細片も出土している。

SK 409 北側を SK 406 により削平された土坑である。約 1.35m × 1.4m で、深さ約 29.5cm を測る。備前焼大甕口縁部、土師器皿が出土している。幅 1.2m、高さ 20cm の木質の痕跡が土層セクションで確認でき、土坑内にあった木枠痕跡の可能性が考えられる。上記の遺物はこの木枠内から出土している。

SK 410 約 1.15m × 1.2m で、深さ約 13cm を測る土坑である。15世紀～16世紀頃の土師器皿

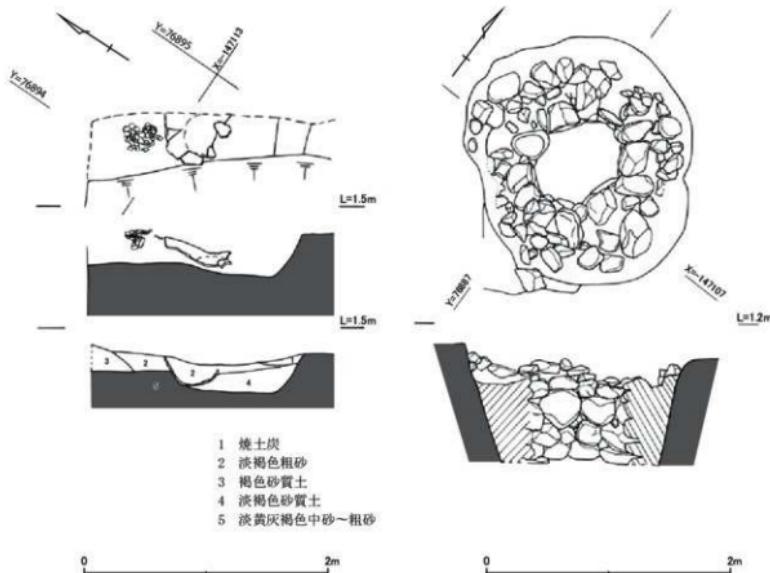


図 10 SK401 平面図 立面図 土層断面図

図 11 SE402 平面図 立面図

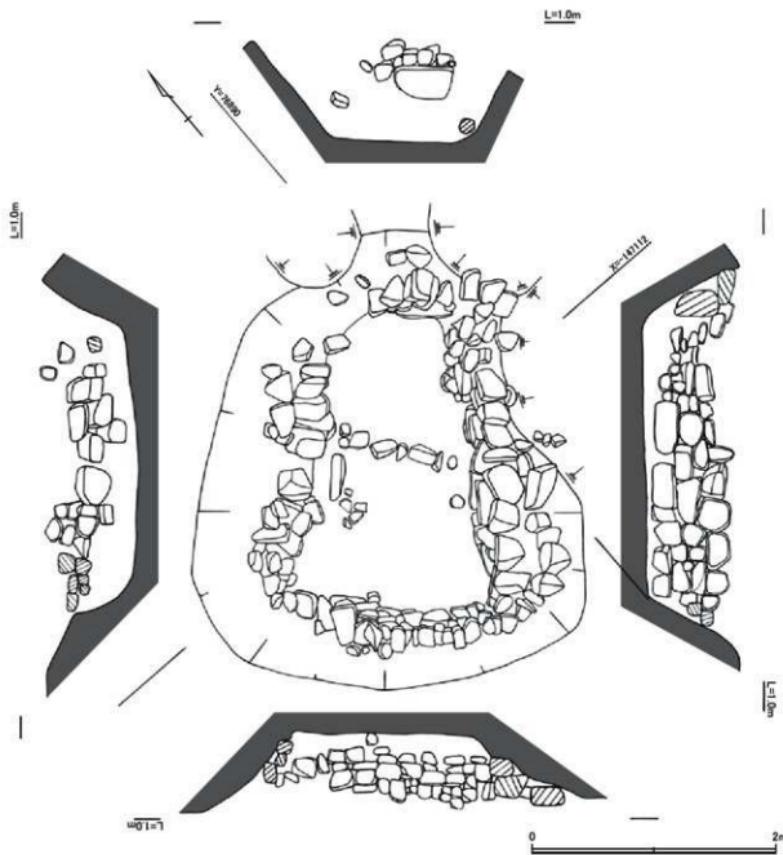


図 12 SX401 平面図 立面図

等を出土している。

小溝群 (SD 401 SD 402 SD 403 SD 404 SD 405) 1区から2区にかけて、等間隔に南北方向に伸びる小溝群である。鋤溝の可能性が高い。小溝間は約0.8m～1.5mを測る。小溝は幅約30cm～50cmで、深さ約12cm～15cmを測る。溝はすべて茶灰褐色砂質土が堆積し、SD 405から備前焼擂鉢、土師器皿が細かな破片で出土している。

SE 401 最上層に石列が残存している井戸である。井戸掘り形は約2.0m×1.8m以上で、井戸内の径約1.42m×1.45mを測る。深さ約0.5mまで掘削したが、底部までは工事影響深度を超えるため、掘削していない。井戸柱材は残存していないため、井戸柱の構造は不明である。15世紀～16世紀頃の土師器の細片や備前焼甕胴部が出土している。

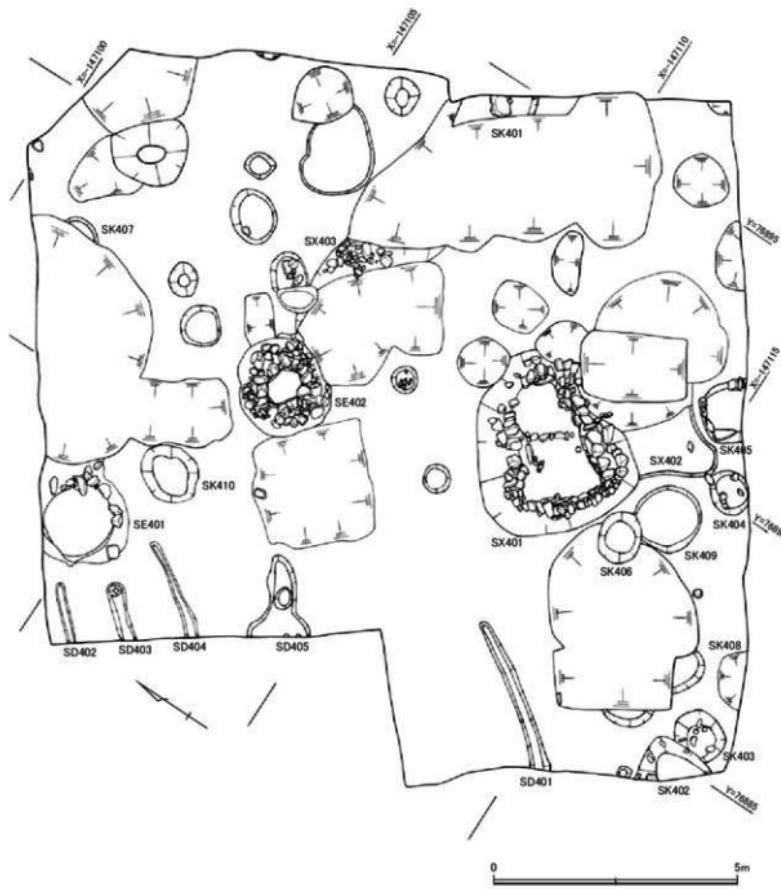


図 13 第 4 遺構面平面図

SE 402 石組井戸である。掘り形は、約 $3.5m \times 4.1m$ で、石組内は約 $3.2m \times 3.5m$ を測る。深さ約 2.0m まで掘削したが、底部は工事影響深度を超えるため、確認していない。土師器や備前焼甕部片が出土している。

SX 401 長方形の石組遺構である。掘り形は約 $6.45m \times 7.5m$ で、石組内は $3.0m \times 5.1m$ を測る。深さは約 1.6m を測る。石組は 3 段～4 段を確認したが、北面の石組だけ崩落した状態で検出した。15 世紀～16 世紀頃の備前焼擂鉢、備前焼甕部、土師器鍋の他、土師器皿を含む土師器の

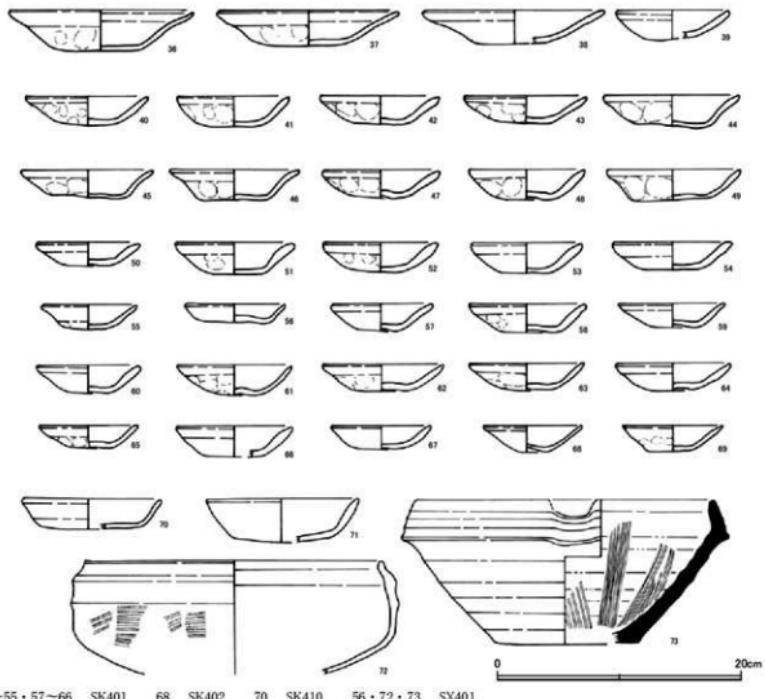


図 14 第 4 遺構面出土土器実測図

細片が多く出土した。

SX 402 約 1.5m × 2.0m 以上で、深さ約 8cm を測る。土師器皿の破片や備前焼甕胴部片が出土した。

SX 403 搾乱により削平され、東肩部付近だけが残存している。土坑の可能性が高い。多くの礫が出土した。全体の規模は削平が著しく不明だが、深さ約 14cm を測る。

第 4 遺構面のまとめ

他の遺構面と同じく、主に土坑、井戸が確認されている。鋤溝の可能性が高い小耕群も確認でき、小規模な耕作地の存在も想定できる。当調査地は主要な道路に面した場所ではなく、道路からは奥まった井戸や廃棄土坑、耕作地等の存在する場所である可能性が考えられる。

第 6 節 第 5 遺構面

主に 15 世紀頃の遺構面であるが 16 世紀の遺構も一部で含む。第 5 遺構面覆土からは 15 世紀の備前焼擂鉢、瀬戸美濃産天目茶碗、土師器皿の他、石製硯等も出土している。

SK 501 調査区南端部で確認した土坑である。径約 2.45m × 0.7m 以上で深さ約 28cm を測る。炭を含む暗灰色砂質土が堆積している。備前焼甕胴部や 15 世紀頃の土師器皿を含む土師器の

細片が多く出土している。

SK 503 調査区南端部で確認した土坑である。約 1.05m × 0.4m 以上で、深さ約 17cm を測る。土師器の細片が多数出土している。

SK 504 西側を攪乱により削平されている。径約 1.3m × 1.2m 以上で、深さ約 28cm を測る土坑である。暗茶灰色砂質土が堆積し、礫を多数確認している。土師器と備前焼擂鉢、甕の破片が多く出土している。

SK 505 西側を攪乱により削平されている。約 1.95m × 1.65m で、深さ約 20cm を測る土坑である。

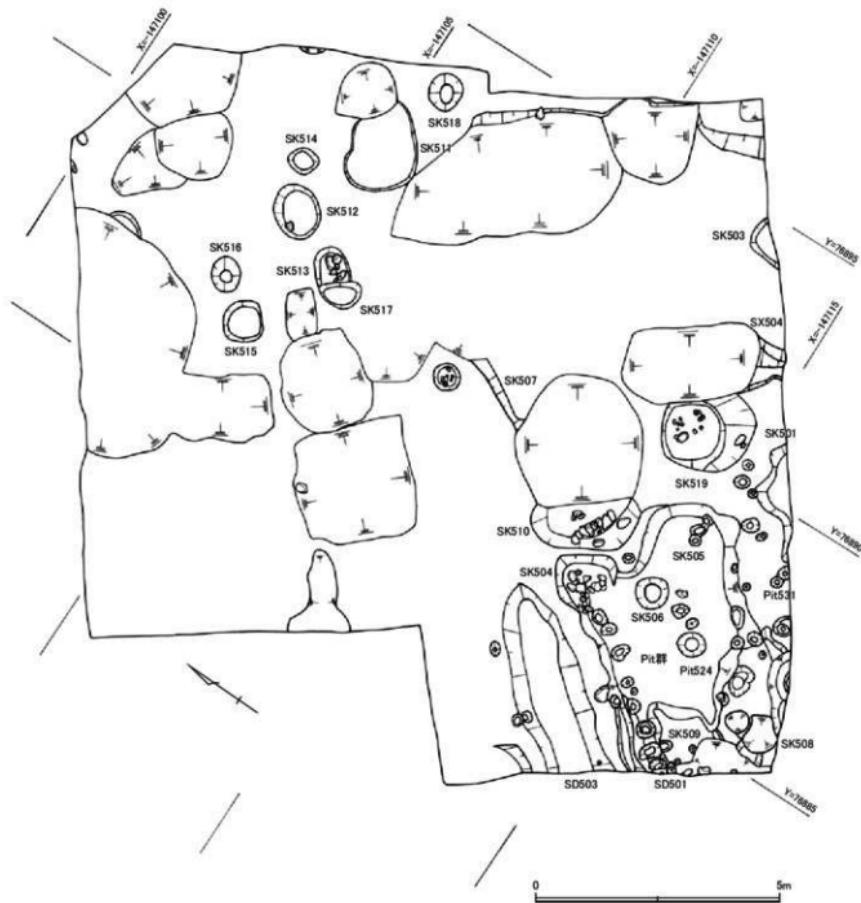
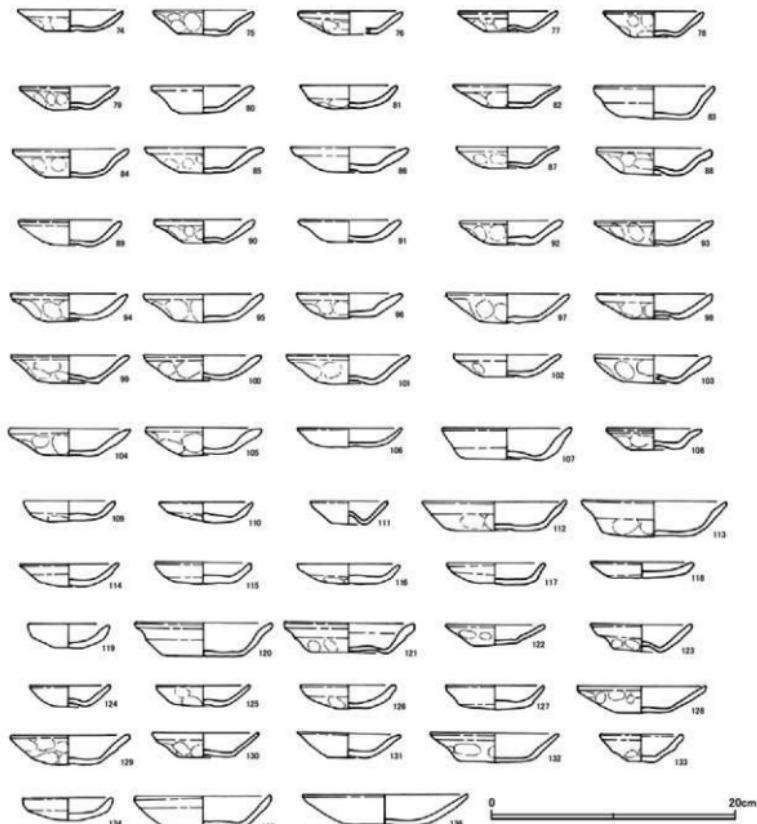


図 15 第 5 造横面平面図



74~82・117~121
SK519
第5構造面検出中
86~105 SK509
108~116 SK512

106・107・133~136
SK519
83~85・122・123 SX504
124~127 SK516
128 SK517

129 SK513
130・131 Pt531
132 Pt524

図16 第5構造面出土土器実測図

土師器の破片が多く出土している。

SK 506 約70cm×65cmで、深さ約38cmを測る。備前と土師器の破片が出土している。

SK 507 東側を擾乱に削平されている土坑である。径約50cm×40cm以上で、深さ約15cmを測る。暗茶色砂質土が堆積し、瓦質火舎が出土している。

SK 508 調査区南端部で検出した土坑である。東側も擾乱により削平されている。現存部で約78cm×30cm、深さ約16cmを測る。土師器の細片が出土している。

SK 509 約1.9m×1.39mで、深さ約21cmを測る土坑である。底部に薄く灰色砂質土が堆積する。15世紀頃の土師器皿多数の他、羽釜、備前焼大甕口縁部片が出土している。

SK 510 東側を削平している土坑である。約2.3m×0.95m以上で、深さ約27cmを測る。溝底

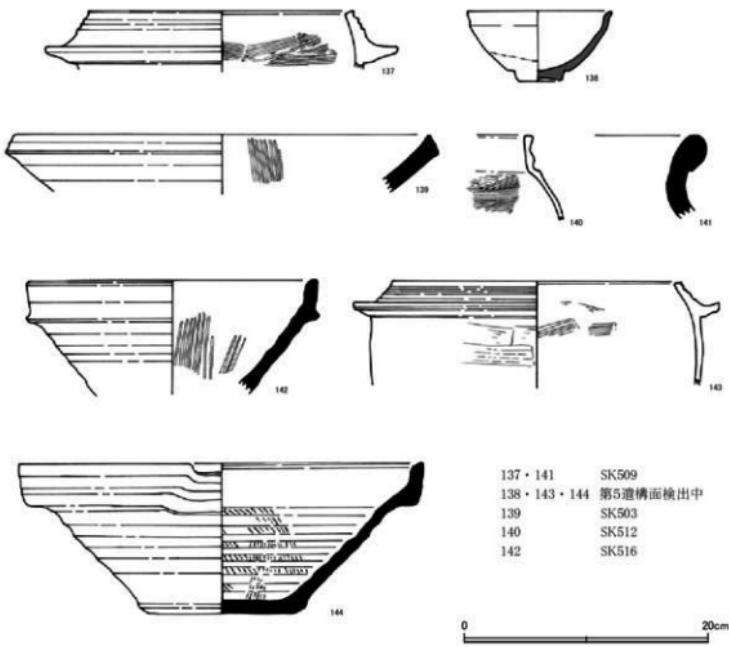


図 17 第 5 遺構面出土土器実測図

部に石列を確認したが、用途は不明である。暗灰色砂質土が堆積している。

SK 511 約 1.5m × 1.8m で、深さ約 40cm を測る土坑である。備前や甕の破片が多く出土している。

SK 512 約 0.9m × 1.1m で、深さ約 21cm を測る土坑である。15世紀頃の土師器鍋の他、土師器皿が多数出土している。

SK 513 約 50cm × 60cm で、深さ約 41cm を測る小土坑である。西側を SK517 により削平されている。15世紀頃の土師器皿が多数出土している。

SK 514 約 65cm × 45cm で、深さ約 19cm を測る土坑である。土師器の細片が少量出土している。

SK 515 88cm × 84cm で、深さ約 21cm を測る土坑である。土師器の細片が少量出土している。

SK 516 約 55cm × 60cm で、深さ約 29cm を測る土坑である。15世紀頃の備前焼擂鉢、土師器皿等が出土している。

SK 517 約 88cm × 54cm で、深さ約 10cm を測る。15世紀頃の土師皿が出土している。

SK 518 約 62cm × 68cm で、深さ約 11cm を測る。15世紀頃の土師皿が出土している。

SK 519 調査区南端部で確認した土坑である。東側を擾乱により削平されている。残存部で約 1.8m × 1.5m 以上で、深さ約 60cm を測る。土師器皿が多数と備前焼大甕胴部片が出土している。

SD 501 東西方向に伸び、幅約 70cm で、深さ約 12cm を測る小溝である。溝底部に柱穴が並ぶが、溝との関係は判断できない。柱穴は 8ヶ所確認でき、柱穴は直径約 47cm ~ 15cm で、深さ約 45cm ~ 10cm を測る。備前焼と土師器の細片が出土している。

SD 503 東西方向に伸び、幅約 140cm で、深さ約 39cm を測る溝である。15世紀頃の備前焼鉢口縁部を含む備前焼と土師器の細片が出土している。

SX 504 調査区東半にある、規模の大きな落ち込みである。人為的に掘削したものか、自然地形の落ち込みかは判断できない。4.5m × 6.0m 以上で、深さ約 50cm を測る。灰褐色砂質土が堆積し、15世紀頃の土師器皿の他、備前焼大甕胴部片等が出土している。

Pit 群 調査区南西部でピットが多数検出された。径約 65cm ~ 27cm で深さ約 45cm ~ 10cm を測る。ただし建物等の並びは確認できなかった。土師器皿、備前焼大甕が破片で出土している。

第 5 遺構面のまとめ

建造物の確認はできていないが、柱穴が多数検出できた遺構面である。逆に井戸は確認できず、土坑の数も少ない。

この柱穴が多数確認できた事から、第4遺構面から上層で、井戸や廃棄土坑の可能性が高い土坑が多数確認できたとの比較し、第5遺構面では土地利用に異なりが認められる。

15世紀~16世紀にかけての時期に、調査区内での土地利用にやや変化がある様である。

第7節 第6遺構面

14世紀~15世紀頃の遺物を含む遺構面である。

SK 601 調査区東端部付近で検出した土坑である。約 60cm × 45cm で、深さ約 18cm を測る。

SK 602 約 1.5m × 1.35m 以上で、深さ約 20cm を測る土坑である。土師器皿や備前焼の細片を多く含む。

SK 605 約 1.25m × 1.4m で、深さ約 25cm を測る土坑である。備前焼甕と土師器皿の細片を少量含む。

SK 606 約 70cm × 85cm で、深さ約 34cm を測る土坑である。土師器皿の細片が多数出土した他、備前焼鉢も破片で出土している。

SK 607 径約 2.2m × 2.2m で、深さ約 28cm を測る土坑である。14世紀~15世紀頃の土師器皿が出土した他、備前焼甕と土師器皿の細片が多数出土している。

SK 608 径約 1.7m × 1.5m で、深さ約 11cm を測る土坑である。14世紀~15世紀頃の土師器皿が出土している。

SK 610 約 50cm × 50cm で、深さ約 12cm を測る土坑である。土師器の細片が出土している。

SK 615 約 1.1m × 0.9m で、深さ約 15cm を測る土坑である。備前焼甕が破片で出土している。

SK 616 調査区北端で検出した集石土坑である。径約 1.1m × 0.58m 以上で、深さ約 4cm を測る。土師器皿、備前焼の細片が少量出土している。

SK 617 約 73cm × 88cm 以上で、深さ約 11cm を測る土坑である。東側を削平されている。土師器の細片が出土している。

SK 618 北側を攪乱により削平されている土坑である。径約 1.1m × 0.75m で、深さ約 21cm を測る。備前焼鉢と土師器皿の細片が出土している。

SK 619 約 25cm × 42cm 以上で、深さ約 18cm を測る土坑である。西側を SK 622 により削平されている。14世紀~15世紀頃の土師器皿、備前焼甕胴部が出土している。幅約 1.0m × 1.4m 以上、深さ約 26cm を測る。暗灰褐色砂質土が堆積している。



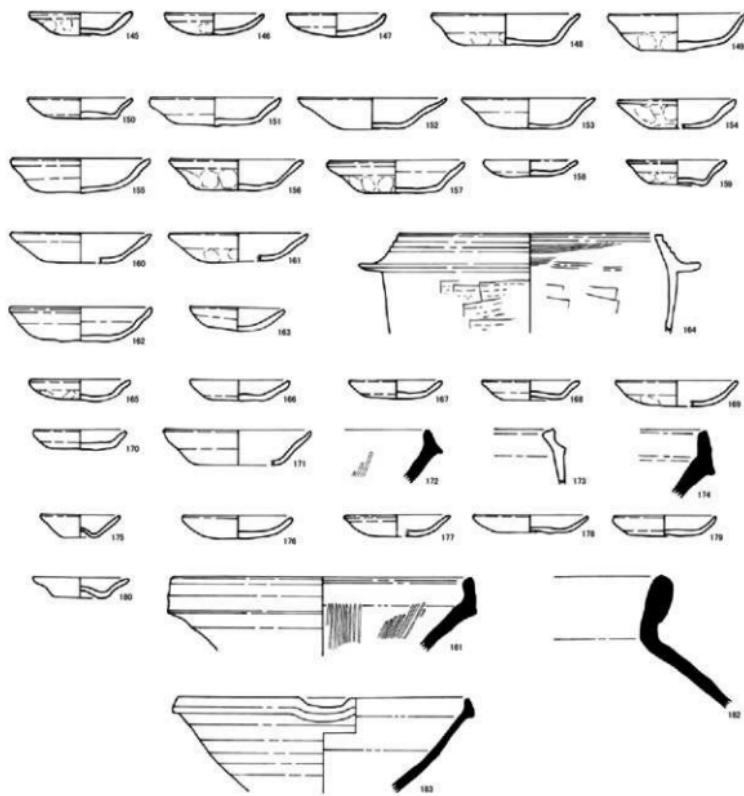
図 18 第 6 遺構面平面図

SK 621 約 96cm × 100cm で、深さ約 32cm を測る。14世紀～15世紀頃の土師器皿が出土している。

SK 622 西側で SK 620 を削平し、東側で SK 619 を削平する土坑である。径約 82cm × 70cm で、深さ約 31cm を測る。土師器皿の他土師器片が少量出土している。

SK 623 約 0.95m × 1.13m で、深さ約 40cm を測る集石土坑である。土師器皿を含む土師器片が少量出土している。

SK 624 約 0.9m × 0.92m で、深さ約 41cm を測る土坑である。土師器の細片、備前焼壺胴部の破片が出土している。



145～153 第6遺構面検出中
 154 SK602
 155～159 SK619
 160 SK607

161 SK608
 162・163 SK621
 164 SK633
 165～183 自然地形落込み

0 20cm

図 19 第6遺構面出土土器実測図

SK 625 約 76cm × 82cm で、深さ約 35cm を測る土坑である。土師器の細片、備前焼甕胴部の破片が出土している。

SK 626 東側を搅乱により削平されている土坑である。76cm × 35cm 以上で、深さ約 21cm を測る。土師器の細片が少量出土している。

SK 627 約 83cm × 70cm で、深さ約 17cm を測る土坑である。土師器の細片が出土している。

SK 628 約 55cm × 48cm で、深さ約 11cm を測る土坑である。土師器の細片が出土している。

- SK 629** 約 59cm × 81cm で、深さ約 19cm を測る土坑である。土師器の細片が出土している。
- SK 630** 東側を攪乱により削平されている。約 74cm × 69cm 以上で、深さ約 41cm を測る土坑である。
- SK 631** 約 43cm × 50cm 以上で、深さ約 10cm を測る土坑である。土師器の細片等が出土している。
- SK 632** 約 38cm × 36cm で、深さ約 10cm を測る。土師器の細片が出土している。
- SK 633** 約 0.7m × 1.08m で、深さ約 29cm を測る土坑である。15世紀頃の羽釜の他、土師器、備前焼甕胴部の破片が出土している。
- SD 601** 約 1.3m で、深さ約 25cm を測る、溝状落ち込みである。土師器皿の細片が出土している。
- SD 602** 約 1.35m ~ 2.35m で、深さ約 37cm を測る溝である。東西方向に伸び、攪乱により削平されている。土師器の細片が出土している。
- SX 601** 西側が徐々に浅くなる落ち込みである。幅約 1.1m × 0.9m 以上で、深さ約 20cm を測る。備前焼擂鉢等が破片で出土している。
- SX 602** 1.3m × 2.4m の範囲で長方形に敷石が認められる遺構である。敷石内から、土師器の細かな破片が出土している。建築物の基礎の可能性も考えられる。
- Pit 群** 西端部付近でピットを多く確認した。殆どが径約 40cm ~ 30cm で、深さ約 39cm ~ 6cm に収まる柱穴の可能性が高い。遺物は、土師器の細片が出土している。ピットの並びは確認できなかった。
- 自然地形の落ち込み** 第 6 遺構面を形成する淡黄灰褐色細砂に灰褐色細砂が堆積する形で落ち込みが多く確認できた。

この落ち込みからは 14 世紀～15 世紀の遺物が出土している。自然地形の落ち込みと考えられる。

第 6 遺構面のまとめ

14 世紀～15 世紀の遺物を含む土坑とピットが確認できた。遺構の密度は希薄であり、土坑もピットも浅い傾向がある。

また、第 6 遺構面から切り込む自然地形の覆土に 14 世紀～15 世紀の遺物を含んでいる。灰色粗砂が堆積する大きな自然地形の落ち込みで、調査区内に数か所存在し、その中に遺物が含まれる。

第 6 遺構面より下層はグリッド調査を実施したが、遺物は出土はせず、湧水も激しかったため、T.P. 約 50cm まで、掘削して終了している。

第3章　まとめ

第1節　調査地周囲の状況について

今回の第84次調査では、室町時代から近世の遺構と遺物を確認した。第3遺構面から第6遺構面は室町時代である。

今回の調査地は「元禄兵庫津絵図」では「西ミヤ町」辺りに位置する。この事から西国街道の宿場町と寺町に囲まれた場所に位置していた事が解る。

今回の調査では、近世から16世紀までの第1～第4遺構面までは、井戸や廃棄土坑とも推定できる土坑が多く確認された。街道筋からは、やや離れた場所と想定できる。

ただし15世紀～16世紀の第5遺構面では、柱穴を多数確認した。おそらく建物が存在したと考えられる。この事から、15世紀～16世紀末の間のどこかの時点で、当調査区内では土地利用法に変化があったと推定できる。

当調査区で遺構の確認できるのは第6遺構面の14世紀～15世紀からで、鎌倉時代までさかのぼらず、周辺の調査結果と比較して、やや新しい室町時代から都市化に伴う生活痕跡が確認される場所である。

第6遺構面を形成するのは、黄褐色細砂と灰褐色細砂であり、この灰褐色細砂の堆積する自然地形の落ち込みからも14世紀～15世紀にかけての遺物が出土している。

第2節　大輪田泊・兵庫津の変遷について

今回の調査地を含む兵庫津遺跡の北半部では多数の調査例があるが、古くて鎌倉時代、室町時代まで、それ以前の時期に遡る遺構と遺物包含層は確認されていない。

それに対し、兵庫津遺跡の南半部では調査例が少ないが、第2次、第26次、第32次、第36次、第67次、第83次調査において、奈良時代～平安時代末の遺構や遺物が出土している。

第2次調査では、遺構は確認されていないが、奈良時代～平安時代末までの遺物が多く出土している。第26次調査と第83次調査では、同一と考えられる後背湿地から平安時代の9世紀～10世紀にかけての須恵器、縁軸陶器、転用硯等が出土している。第32次調査では奈良時代～平安時代前半の溝等が確認され、大輪田泊の港湾施設の一部と推測されている。第36次調査では平安時代前期の井戸が確認されている。第67次調査では奈良時代～平安時代末の土坑を確認している他、下層に古墳時代の遺構面が存在する可能性があることも確認されている。

これらの調査成果から兵庫津遺跡南半部では、江戸時代の真光寺、薬仙寺の東側を中心とする範囲に、奈良時代～平安時代末までの遺構や遺物の分布域があると理解できる。

以上の事からこの付近に、奈良時代～平安時代末までの大輪田泊が存在する事が推定できる。

奈良時代～平安時代末の遺構と遺物を確認した第2次、第26次、第32次、第36次、第67次、第83次調査が実施された範囲において、第2次調査地点は「兵庫津元禄絵図」でほぼ薬仙寺北側の村辺りに位置し、中近世の遺構と遺物も確認されている。また、第36次調査では15世紀の柱穴群、近世の廃棄土坑、長楽寺関連の遺構、第67次調査では鎌倉時代～江戸中期までの遺構が確認されている。この3例を除き、鎌倉時代～室町時代、近世の遺構は確認されていない。近世の「元禄兵庫津絵図」によると兵庫津遺跡南半部は、真光寺と薬仙寺及び第2次調査地点周辺以外はほぼ畠地となっている。

兵庫津遺跡南半部において確認されている奈良時代～平安時代末の遺構と遺物を、大輪田泊に関連するものと推定した場合、この地域は源平の一の谷合戦による大輪田泊の荒廃後、発掘

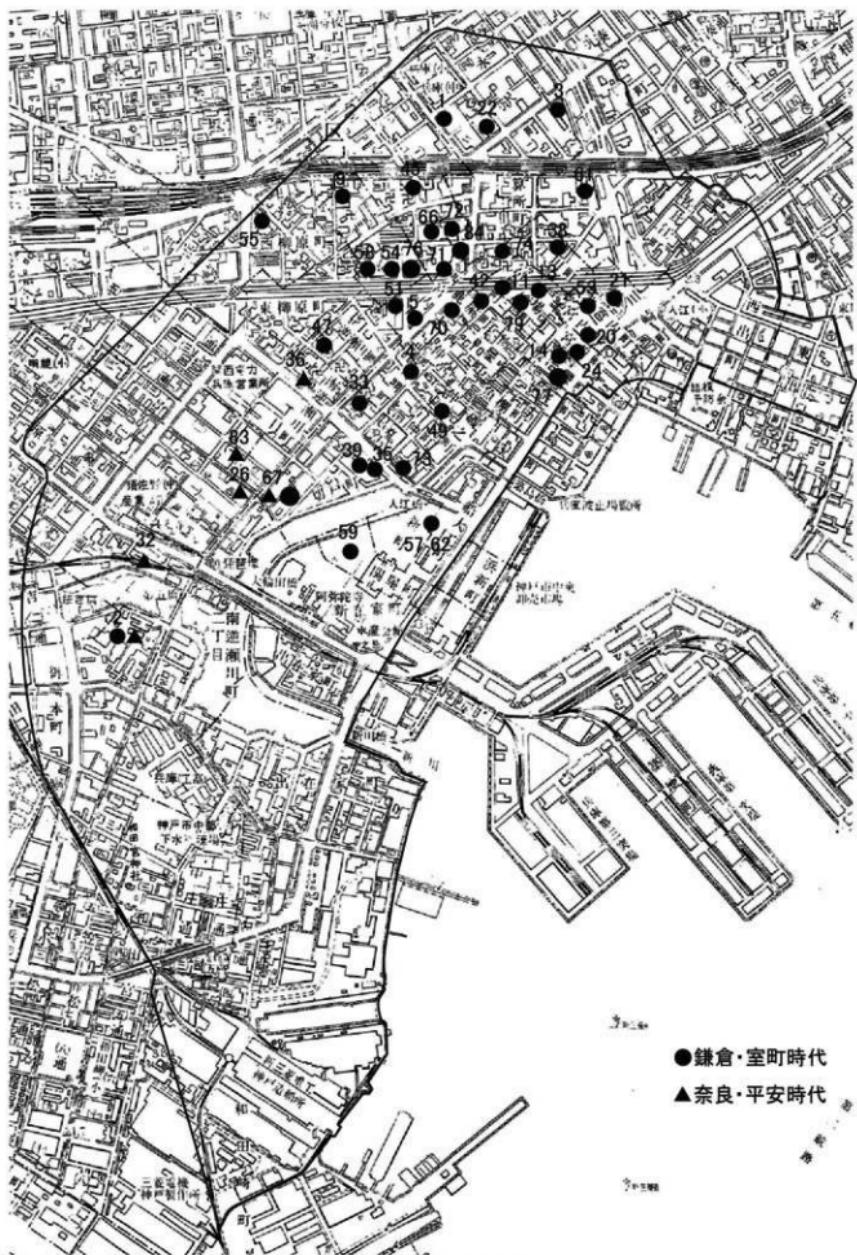


図 20 奈良～平安時代・鎌倉～室町時代遺構面調査地点位置図 S=1/10000

調査の場所と、「元禄兵庫津絵図」において畠地として画かれている事を合わせ考えると、鎌倉時代～江戸時代の元禄期まで多くの地域が荒無地か畠地であった可能性が想定できる。

おそらく源平による争乱後に復興した大輪田泊、後の兵庫津の中心部分は、発掘調査で鎌倉時代～室町時代にかけての遺構が多く確認されている兵庫津遺跡北半部に位置すると推定できる。鎌倉時代に奈良時代～平安時代末の大輪田泊とは少し位置を違えた北側に大輪田泊が再建され、それ以降の室町時代にかけて、遺跡北半部に港湾都市としての兵庫津が成立していったのであろう。近世も位置的にこの室町時代の兵庫津を継承して拡大発展したと考える。

『兵庫津の総合的研究』(2008)によると、兵庫津遺跡南半部に奈良時代～平安時代末までの大輪田泊が存在するだろう事は文献史学の分野から述べられ(大村拓生「大輪田・福原と兵庫津」)、考古学の分野でも兵庫津遺跡南半部に大輪田泊が存在するだろう事も想定されている(渡辺伸行「兵庫津遺跡の発掘調査の成果—神戸市実施の調査を中心として—」)。

今回の調査ではこれまでの調査成果と合わせ、奈良時代～平安時代末の大輪田泊が兵庫津遺跡南半部に存在すると推定できただけでなく、鎌倉時代にはその中心を兵庫津遺跡北半部に移動して復興し、港湾都市として近世まで続く可能性も推定できる結果となった。また、奈良時代～平安時代末までの大輪田泊推定地である兵庫津遺跡南半部は、その多くの場所が「元禄兵庫津絵図」では畠地であり、発掘調査成果も考え合わせ、基本的に鎌倉時代から江戸時代の元禄期までは都市化しなかった可能性も考えられた。

ただし、兵庫津遺跡南半部の調査はまだ少なく、現段階では不明確な部分が多いのも事実である。今後の調査の進展により、徐々に詳細が明らかになると見える。

今回の84次調査は兵庫津遺跡北半部に位置する。鎌倉時代～室町時代、江戸時代にかけて、遺跡北半部で兵庫津が都市として拡大していく事を証明する資料の一部を、得る事ができた。

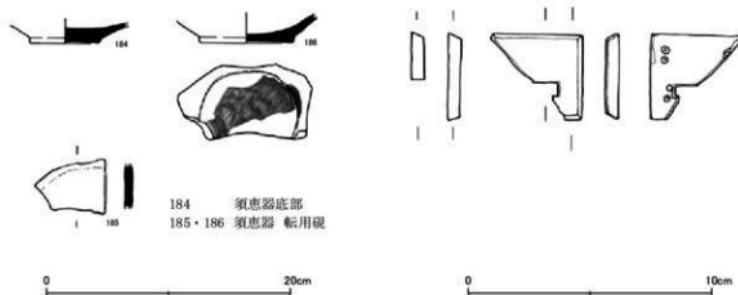


図 21 第 83 次調査奈良～平安時代後背湿地出土遺物 参考資料

図 22 SK304 出土巡方実測図

第3節 金属製品について

金属製品には釘、小柄、煙管、飾金具、銭貨などがある。

鉄製品(M1～27):M1～26は角釘である。M1～3は5寸以上の長さが推定される重厚な角釘で、構造材の結合に用いられたものであろう。いずれにも木質が残り、M1は木材の板面、M2は追柾面に対して打ち込まれている。特にM3には2つの異なる材の木質が残っていることから、幅1cm弱の2本の角釘を用いて、ある材の板面と別材の木口面を結合させていたことがわかる。その他は全長1～3寸前後の一般的な角釘である(M4～24)。頭部の整形方法は、①棒状素材の端部を折り曲げたもの(M5・10)、②端部を偏平に叩き延ばしたもの(M4・7～9)、③叩き延ばした端部を手前に巻き込んで頭部としたもの(M6・11～24)の大きく3種がある。①と③はそれぞれ典型的な皆折釘と巻頭釘だが、②は未製品もしくは未使用品の状態であろうか。ただ、M7・9のように胴部ないし頭部が屈曲したものは未使用品とは断定しにくいので、ここでは評価を避けておきたい。M27は小柄で、残存長11.9cm、元幅1.25cm、茎長6.39cmを測る。先端部を欠損している。

銅製品(M28～32):M28は煙管の雁首で、肩を持たず、羅字との接合部にわずかに木質が残る。M29・30は煙管の吸口で、M30は断面が六角形を呈す。M31は飾金具、M32は先端部が尖る延板状の銅製品である。

銭貨:26枚が出土しており、すべて銅銭である(M33～55)。このうち渡来銭が少なくとも11種22枚と大半を占める。寛永通寶は、古寛永が3枚、新寛永が1枚出土したのみである。

番号	遺物名	法度		備考・頭部形状	台帳番号
		長軸	幅/径		
M1	角釘	(11.10)	2.10	木質	199-1
M2	角釘	(10.70)	2.25	木質	199-3
M3	角釘	(13.00)	(0.90)	木質、2本	199-2
M4	角釘	(9.76)	0.52	延	251-1
M5	角釘	9.50	0.65	折	118
M6	角釘	(7.30)	0.61	巻	163
M7	角釘	(5.07)	0.43	延	281
M8	角釘	(4.87)	0.33	延	336
M9	角釘	(4.73)	0.48	延	998-1
M10	角釘	(3.85)	0.56	折	998-2
M11	角釘	(3.96)	0.51	巻	119
M12	角釘	(3.85)	0.38	巻	113
M13	角釘	(6.20)	0.45	巻	053
M14	角釘	(4.99)	0.52	巻	063-2
M15	角釘	(4.82)	0.52	巻	047-1
M16	角釘	(4.73)	0.41	巻	287
M17	角釘	(4.44)	0.42	巻	253-1
M18	角釘	(3.86)	0.48	巻	253-2
M19	角釘	(4.15)	0.54	巻	291
M20	角釘	(3.78)	0.41	巻	140
M21	角釘	(5.40)	0.41	巻	312-1
M22	角釘	(3.77)	0.39	巻	312-2
M23	角釘	(3.54)	0.34	巻	213-1
M24	角釘	(3.64)	0.32	巻	018-2
M25	角釘	(5.93)	0.78	不明	249
M26	角釘	(5.84)	0.45	不明	251-2
M27	小柄	(11.90)	1.25		063-1
M28	椎管(雁首)	(6.20)	0.88	羅字木質残	193
M29	煙管(吸口)	5.83	0.82		246
M30	煙管(吸口)	(6.50)	1.47	断面六角形	036
M31	飾金具	(2.22)	(1.79)	意匠あり	063-6
M32	紙板状軸頭製品	(3.82)	0.58	先端尖る	054-2

番号	銘種	計測値 (法量mm、重量g)					台帳番号	
		外縁外径	外縁内径	内側外径	内側内径	外縁厚		
M33	開元通寶	24.46	19.70	8.02	6.82	1.21	3.28	120-9-1
M34	淳化元通寶	24.58	18.05	7.22	5.93	1.19	3.75	120-5
M35	皇宋元通寶	25.19	20.99	8.57	6.90	1.10	3.46	120-6
M36	熙寧元通寶	23.50	18.49	7.70	5.86	1.54	(3.86)	120-6
M37	元祐通寶	24.46	17.95	7.09	6.03	1.35	3.99	047-2
M38	元祐通寶	24.07	19.94	8.55	6.68	1.19	3.17	120-3
M39	元祐通寶	24.60	18.84	8.22	6.65	1.45	3.64	120-9-2
M40	元祐通寶	24.88	20.68	8.22	6.72	1.27	3.81	120-7
M41	元祐通寶***	24.47	18.05	7.45	6.10	1.07	3.07	120-10
M42	紹聖元通寶	24.35	19.35	7.82	5.83	1.75	4.22	098-3
M43	大觀通寶	24.25	20.86	7.88	6.54	1.15	3.50	120-4
M44	大观通○	—	—	—	—	1.09	(1.24)	045-1
M45	政和通寶	24.29	20.51	8.13	6.94	1.27	3.80	120-1
M46	政和通寶	24.71	20.79	8.20	6.18	1.37	3.74	120-2
M47	○和○○	—	—	—	—	1.56	(1.75)	028-2
M48	○和○○	—	—	—	—	1.13	(0.70)	129
M49	○和○○	—	—	—	—	1.37	(1.33)	063-4
M50	洪武通寶**	23.22	19.36	7.33	4.96	1.43	3.32	122
M51	永樂通寶	24.28	19.96	7.33	6.00	1.06	2.15	204
M52	古寛永	24.37	19.54	6.84	5.48	1.26	3.39	002
M53	古寛永	25.03	19.82	7.68	6.00	1.11	3.28	216
M54	古寛永	24.63	19.38	7.33	5.53	1.03	2.89	175
M55	新寛永	25.00	19.71	7.14	5.67	1.27	3.16	003

註)

* M1～3の角釘は、楕×椭写真により木質を通して推測した実質長・幅を示した。

** 銘種**は、2枚が囲着して出土したことを示す。

銘種*は、3枚が囲着して出土したことを示す。

**複数枚が囲着して出土した場合は、写真図版において一番上に重なっている個体の計測値を示した。また、重量は枚数で除した値を示した。

図23 金属製品観察表

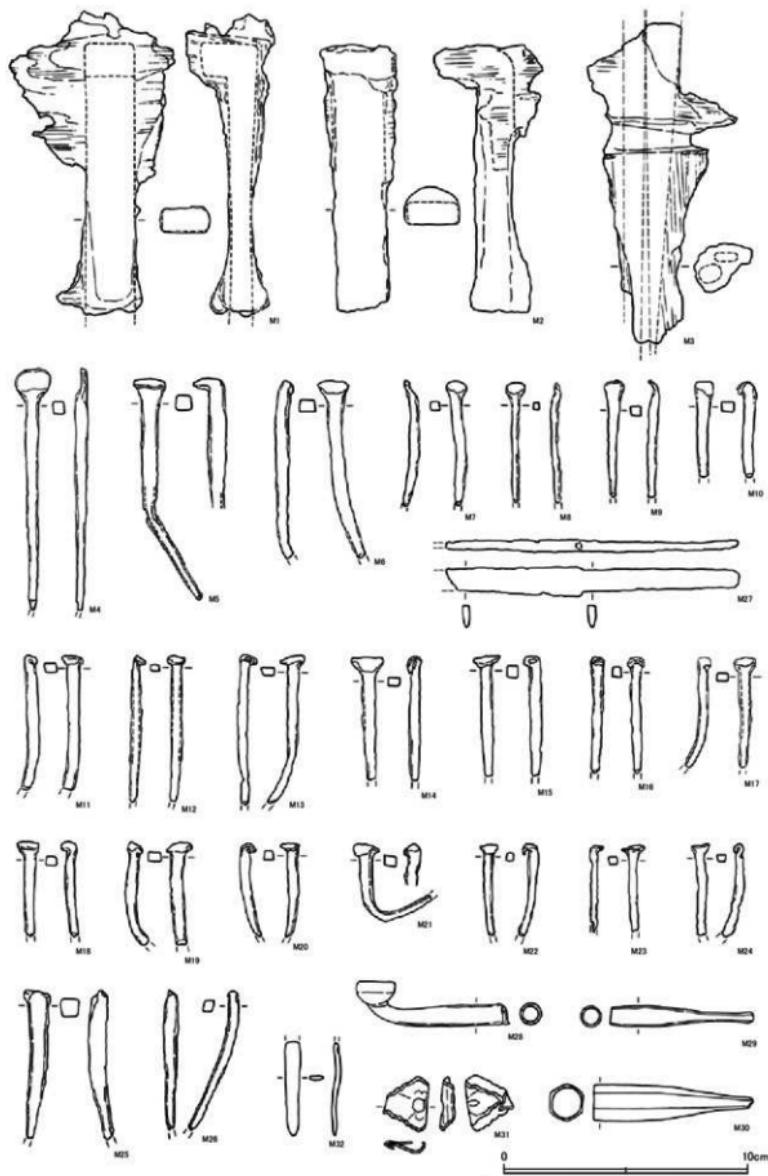


図 24 金属製品実測図



1区 第1遺構面全景（南西から）



2区 第1遺構面全景（南西から）

写真図版 2



2区 第2遺構面全景（南西から）



1区 第3遺構面全景（南西から）



2区 第3遺構面全景（南西から）



1区 第4遺構面全景（南西から）

写真図版 4



2区 第4・第5遺構面全景（南西から）



1区 第5遺構面全景（南西から）



1区 第6遺構面全景（南西から）

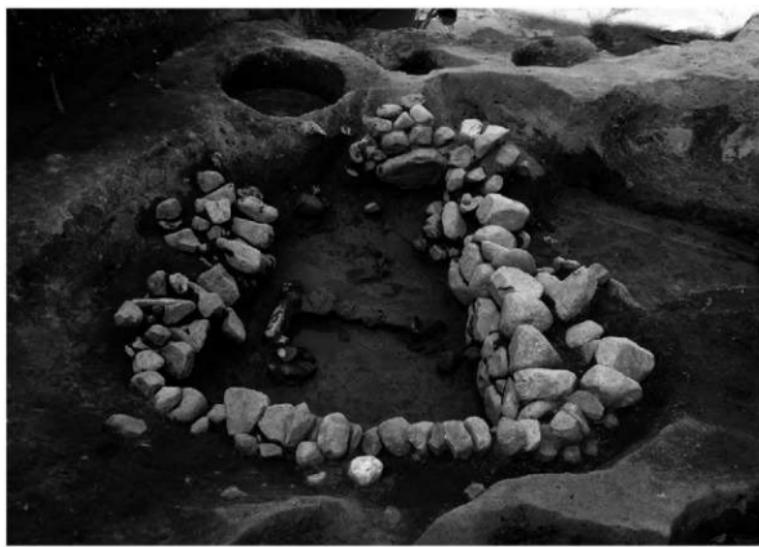


2区 第6遺構面全景（南西から）

写真図版 6



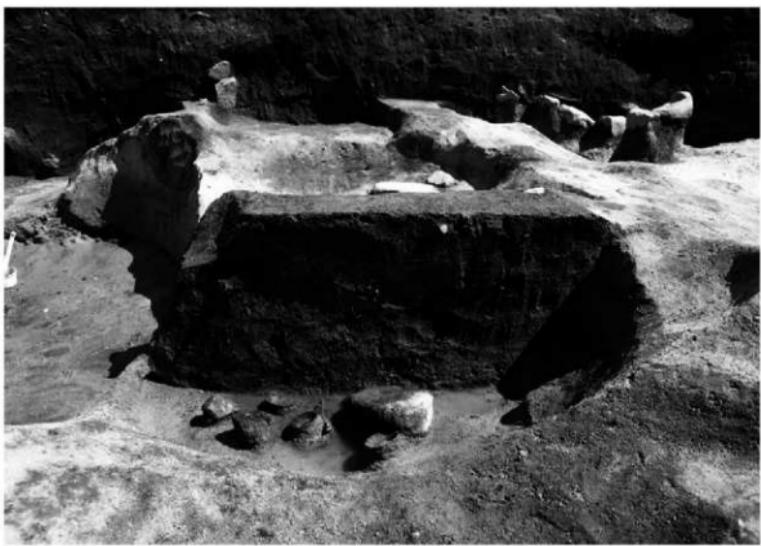
2区 第6遺構面自然地形全景（南西から）



1区 SX401（北西から）



1区 SK401（南西から）



1区 SK409（北から）

写真図版 8



1区 SK519（南から）



1区 第5遺構面柱穴列（北から）



2区 SE301（南西から）



2区 SE402（南から）



第1・第2遺構面出土土器



第3遺構面出土土器



第4遺構面出土土器



第5遺構面出土土器



第5 遺構面出土土器



第6 遺構面出土土器



第6 遺構面自然地形の落込み出土土器



SX401 出土備前焼擂鉢



SK401 出土土師器皿



SK401 出土備前焼甕



SK509 出土土師器皿



SX504 出土土師器皿



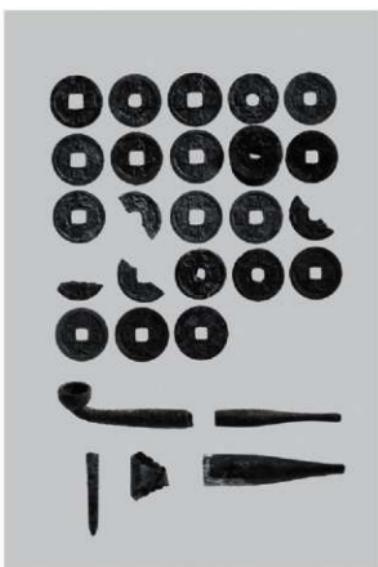
出土石製品



SK304 出土巡方（表）



SK304 出土巡方（裏）



出土金属遺物



出土金属遺物

報告書抄録

ふりがな	ひょうごついせきだい84じはくつちょうさほうくしょ							
書名	兵庫津遺跡第84次発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	浅谷 誠吾(編) 加納 大吾 山田 衍生							
編集機関	神戸市文化スポーツ局							
所在地	神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-5799							
発行年月日	西暦2021年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
兵庫津遺跡	兵庫県神戸市 兵庫区三川口町 1丁目1-61・62	28105	4-24	34度 40分 15秒	135度 10分 20秒	20200309～ 20200612	220 m ² 延～1320 m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
兵庫津遺跡	集落跡	奈良時代～ 江戸時代		室町時代～近世末までの井戸、土坑、 柱穴等を6面の遺構面から検出した。		土器・瓦質土 器・備前・丹波・ 肥前磁器	15世紀～16世紀 以前の第5遺構 面と第6遺構面 では柱穴を確認 した。	
要約								
神戸市兵庫区に所在する兵庫津遺跡は奈良時代から近世に至る港湾遺跡・港湾都市遺跡である。今回の調査では室町時代～近世末までの6面の遺構面から多くの遺構を検出した。								

兵庫津遺跡第84次発掘調査報告書

令和3年3月 印刷

令和3年3月 発行

発行

神戸市文化スポーツ局文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

Tel 078-322-5799

印刷

株式会社クリアチオ

神戸市中央区新港町8-2 新港貿易会館4階32

Tel 078-322-0515